



Title	大阪大学におけるSelf-Access Learning Services利用学生を対象としたアンケート調査の実施
Author(s)	中橋, 真穂; アンダーソン, ショーン
Citation	大阪大学高等教育研究. 2025, 13, p. 53-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100714
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学における Self-Access Learning Services 利用学生を対象としたアンケート調査の実施

中橋 真穂^{*1}・アンダーソン ショーン^{*2}

A Survey of Students Utilizing Self-Access Learning Services at Osaka University

NAKASHI Maho^{*1}, ANDERSSON Shawn^{*2}

ラーナーオートノミーに関わる研究は、ヨーロッパを中心に1970年代頃から進められ、フランスで世界初のSelf-Access Learning Center (SALC) が設立されたことから始まった (Benson, 2007)。その後、ヨーロッパをはじめ、北米やアジアに広がっていく。そして昨今、日本でもその必要性が注目され、ライティングセンターを含む自律学習支援センターを設置する大学が増えている。これらを背景に大阪大学でも、2015年にSelf-Access Learning Servicesである「ライティングヘルプデスク (後のランゲージサポートデスク)」を開設した。本稿は、本デスクを利用した学生を対象に実施したアンケートをもとに、現状とこれからを考察した。結果、学部学生と大学院生の利用者がおおよそ半数ずつであること、利用者の約半数がIELTSなどの英語試験対策を含む、留学準備を目的に利用していることが明らかとなった。デスクの必要性を再確認するとともに、継続的な予算の確保といった今後の課題についても指摘した。

キーワード：学習者自律, SALC, アンケート調査, Self-Access Learning Services

Research on learner autonomy dates back to around the 1970s, primarily in Europe, and it began with the establishment of the world's first Self-Access Learning Center (SALC) in France (Benson, 2007). Since then, the concept has spread from Europe to North America and Asia. Recently, the necessity of such centers has gained attention in Japan, leading to an increase in universities establishing autonomous learning support centers, including writing centers. Against this backdrop, Osaka University established a self-access learning service called the "Writing Help Desk" (later renamed the "Language Support Desk") in 2015. This paper examines the current state and future directions of this desk based on a survey conducted among its student users. The results revealed that approximately half of the users are undergraduate students and the other half are graduate students. Additionally, about half of the users utilize the desk for study abroad preparation, including preparation for English proficiency tests such as IELTS. The findings reaffirm the necessity of the desk and point to future challenges, such as securing a sustainable budget.

Keywords : Learner autonomy, SALC, Questionnaire survey, Self-access Learning Services

所 属：^{*1}大阪大学大学院工学研究科国際交流推進センター ^{*2}大阪大学大学院人文学研究科

Affiliation : ^{*1}Center for International Affairs Graduate School of Engineering, Osaka University ^{*2}Graduate School of Humanities, Osaka University

連絡先 : nakahashi-m@fsao.eng.osaka-u.ac.jp (中橋 真穂)

1 はじめに

ラーナーオートノミー、いわゆる学習者自律に関わる研究は、ヨーロッパを中心に1970年代頃から進められ、世界初のSelf-Access Learning Center (SALC, 自律的な外国語学習の支援を目的とした施設) がフランスで設立されたことから始まる (Benson, 2007)。当時、自由主義、個人主義、行動主義への反発や、ヨーロッパでの移民増加に伴う言語教育の需要増加や教育者不足等が、SALC設立に大きな影響を与えたとされている (Gremmo & Riley, 1995)。その後、多くの教育・研究機関でSALCが設置され、ヨーロッパのみならず、北米やアジアに広がっていった。

そして昨今、日本でもその必要性が注目され、例えば東京大学、広島大学や神田外語大学など、ライティングセンターを含む自律学習支援センターを設置する大学が増えている。学生のニーズに合わせ、語学学習のみならず、文化理解のイベントや留学生との交流の場を兼ねるなど、各大学によって様々な取り組みが実施されている。

これらを背景に、2015年度、英語による研究発信能力の向上を目標に、大阪大学大学院工学研究科国際交流推進センターでは、工学部・工学研究科の学生向けに「ライティングヘルプデスク」を開設した。また、2016年度からはライティングのみならず、プレゼンテーションセッションやカンパセーションセッションも増設し、「ランゲージサポートデスク」とすることで、目的や学生自身の伸ばしたい力に合わせた総合的なアウトプット能力向上の支援を目指した。さらに、2017年度には対象を工学部・工学研究科だけではなく、全学の学生に拡大・運営し、現在に至るまで全学の多くの学生に利用されてきた。

本稿は、利用学生に行ったアンケート調査の結果から、デスクの現状と今後について考察する。

2 ランゲージサポートデスクの設置

デスク開設に向け、国内外の大学のSALC訪問を通して、各大学の取り組みや特徴を視察した。開設当初、学生からはライティングに関わるニーズが多かったことを受け、「ライティングヘルプデスク」として立ち上げることにし、ライティングセンターに関する先行研究から開設に向けた流れや取り組みについて参考にした (中橋・アンダーソン 2017)。例えば、Simpson (2004) は、

ライティングセンターを開設する背景や大学の状況などをよく把握し、それらを考慮することなしに効果的に活用はできないとしている。そして、留意点として次の(1)～(4)を挙げた。(1) ミッション：他大学の形式を模倣するだけではなく、ライティングセンターのミッションを明白にすることが不可欠である。さらに、そのミッションは大学のミッションと一致、または支援するものである必要がある。(2) 対象学生：対象学生の正確な把握とニーズの分析が必要である。(3) 予算：長期的な運用を目指す上で、予算獲得方法および管理について理解しておくことが重要である。(4) ニーズ分析：設立、運営の際には大学がライティングセンターを必要とする理由と予算・人員・設備・施設などを、学生へのアンケートや上層部の意向調査を通し把握する必要がある。また、吉田他 (2010) は、最初から立派な施設や設備が必ずしも必要でない点を指摘している。多くの大学のライティングセンターでは、例えば最初から全学向けに設置するのではなく、一つの学部で小規模なものからスタートし、運営開始後に利用の記録などの実績を残しニーズの高さを示すことにより少しずつ周囲の理解を得て施設などの充実を図ったものも多い。

こういった情報と、大阪大学のニーズや予算を照らし合わせ、大阪大学の学生が必要とする自律的な外国語学習支援施設の在り方について思案を重ねた。先述したように、2015年度開始時点では、「ライティングヘルプデスク」と名付け、工学部・工学研究科の学生を対象にし、2016年からはより多様なニーズに対応できるよう、「ランゲージサポートデスク」に改名し、ライティング、プレゼンテーション、カンパセーションセッションの3つのセッションに拡大して運用した。

- ・場所：工学研究科国際交流推進センター スチューデントルーム内
- ・開架時間：平日9:30～17:00（講師の対応可能時間により変動あり）、授業期間外（長期夏季休暇他）も利用可能。
- ・内容：ライティング、プレゼンテーション、カンパセーションの3つのセッション
- ・形式：英語ネイティブ講師1名 対 学生1名
- ・予約方法：オンライン予約サイトから予約をする。事前に確認してほしい原稿があればセッション2日前までに提出する（1回のセッションにつき1500字以内）。

なお、2024年11月時点では、非常勤講師3名、予約枠数はライティングセッション4枠（週）、カンパセーションセッション8枠（週）で運営している。ただし、講師のスケジュールによって、予約可能枠数は変動する。

以下、それぞれのセッションの具体的な内容を掲載する。

(1) ライティングセッション

英文原稿の、基本的な構成、文法などを確認する。

例) 投稿論文、発表資料、発表原稿、英語試験対策 (TOEFL, IELTS等)、留学申請書、インターンシップ履歴書他

(2) プレゼンテーションセッション

プレゼンテーションの基本的なスキル（アイコンタクト、ジェスチャー、声のトーン）やスライドなどを確認、練習する。

例) 学会発表、研究会発表、インターンシップ等面接練習、国際交流イベント司会他

(3) カンパセーションセッション

留学準備やIELTS、TOEFL対策など、基本的な英語での会話を練習する。

例) 留学準備、英語試験対策 (TOEIC, TOEFL, IELTS)、研究活動のための英語他

例えば、ライティングセッションにおいては、英語によるエッセイの基本的な構成、文章の流れ、文法等に関わる指導を支援内容とし、研究コンテンツなどの論文の内容自体については各研究室の教員の指導範囲であり、本デスクにおいては指導の対象外とした。また、翻訳の依頼や、研究や教育に関係のない内容も対象外とした。利用内容に関わらず、間違いを指摘し訂正するのではなく、あくまでも教育の一環とし、よりよい文章に向け学生自らが気付き、改善できるよう支援することに重きを置いている。

講師については、非常勤講師（英語ネイティブ）に担当を依頼している。対面及びオンラインによるセッションを選択できるようにし、対面の場合、カンパセーションセッションは工学研究科国際交流推進センター内のチューデントルーム、ライティングセッション及びプレゼンテーションセッションは別に個室を確保した。カン

パセーションセッションに関しては、学生が自由に利用可能なオープンスペースの一角で実施することでリラックスした雰囲気の中、気軽に利用できる環境を整えている。一方、ライティングセッション及びプレゼンテーションセッションに関しては、投稿論文などで機密事項を含むこともあるため、個室で実施できるよう配慮した。

また、2017年の全学展開をきっかけに、他のキャンパスに所属する学生も気軽にセッションが受けられるよう、オンラインSkypeセッションを開設した。吹田キャンパスの学生には引き続き対面セッションを基本とし、豊中、箕面キャンパスの学生はSkypeにより、吹田キャンパスに足を運ばずにセッションを利用できるように環境を整えた。新型コロナウイルス感染症拡大時には、対面セッションを休止し、オンライン（Skype）セッションのみを実施した。オンラインセッションの場合は、強制はしないものの、基本的にはパソコン上のカメラで講師／利用学生の顔が見られるようにした。これは、第一に利用学生が講師の表情を見ながら進めることで安心してセッションを受けられること、第二に互いの口の動きや表情を見ながら意思疎通をすることで、より理解しやすく、セッションが円滑に進められるためである。また、Skypeを利用したライティングセッションでは、ドキュメント等を画面上で互いに共有しながらセッションを進めた。担当講師及び利用学生のコメントによると、Skype上でライティングのドキュメントを共有しながら進める方法は、互いにパソコン上で文章を確認できるため非常に効率よく、好評だった。

予約システムは、外部予約システムを利用し、デスク専用の予約ページを開設し、そこからオンライン予約をするか、国際交流推進センターに来訪し直接予約をするシステムを構築した。

3 利用者アンケート

以上のような流れで設置されたデスクでは、セッション開始時とセッション終了後に、利用者にアンケートへの回答を依頼している。これらのデータの一部をグラフにし、利用者人数や内容、利用者のTOEICの点数などを見ることを通して、利用者の傾向を分析する。なお、2015年から2018年3月までは、紙面上によるアンケートを実施し、2018年4月よりオンライン上でのアンケートに一部切り替えた（状況により紙面でのアンケートも平行して継続）。本稿では、2018年4月から2024年9月のオンライン上でのアンケート結果（Skypeセッション

及び対面セッションの両方、計1,658件）を対象に分析をした。

3-1 利用者数

利用者数に関しては、年度の途中であるため、2023年度までのデータを提示する。開設時から利用者は増え、2018年は年間約650人の利用があった。しかし、2019年、2021年度にそれぞれ大幅な予算の削減があり、それに伴って予約枠も前年比6～7割程度に減らさざるを得なかったことが、利用者の人数にそのまま影響している。ただし、予約稼働率は約100%を維持しており、予約枠削減後は予約が取れないといった問い合わせが続いていることから、高いニーズが確認できる。

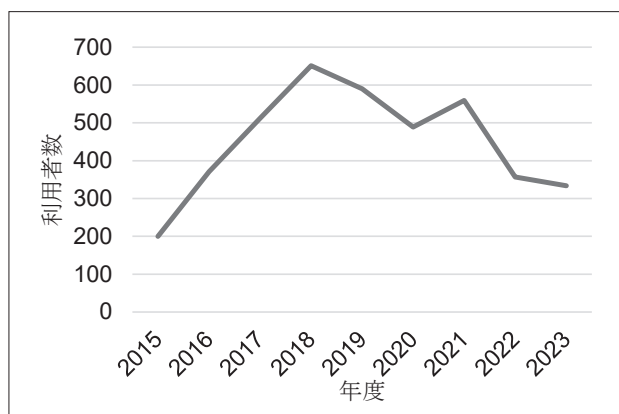


図1 利用者数

3-2 利用学生の学部・研究科内訳

最も利用が多いのが外国語学部・人文学研究科、次いで工学部・工学研究科、人間科学部・人間科学研究科、医学部・医学研究科、経済学部・経済学研究科、基礎工学部・基礎工学研究科の順となっている。学部によって利用者数の差はあるものの、グラフから、様々な学部・研究科からの幅広い利用があることが分かる。

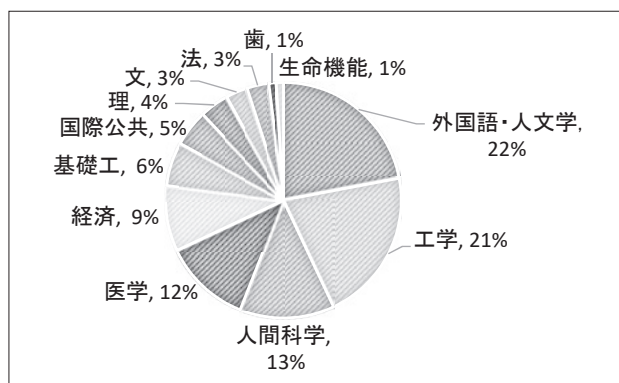


図2 学部・研究科内訳

3-3 学年内訳

3つのセッション（ライティング、プレゼンテーション、カンバセーション）を合わせると学部生の割合が約49%、博士前期課程の割合が約25%、博士後期課程の割合が約26%と、学部生と大学院生の割合が約半々となっている。学年を問わず、利用があることが分かる。ただし、カンバセーションセッションは学部生が51%と半数以上を占めており、ライティングセッションは大学院生が52%、プレゼンテーションセッションに関しては大学院生が72%と、大学院生の割合が高い。それぞれ、学部生は留学準備のためのIELTSのスピーキング等の練習を目的に繰り返し利用すること、大学院生になると論文や国際学会の発表準備を目的に利用することから、セッション別での利用学年の違いが出ていると考えられる。

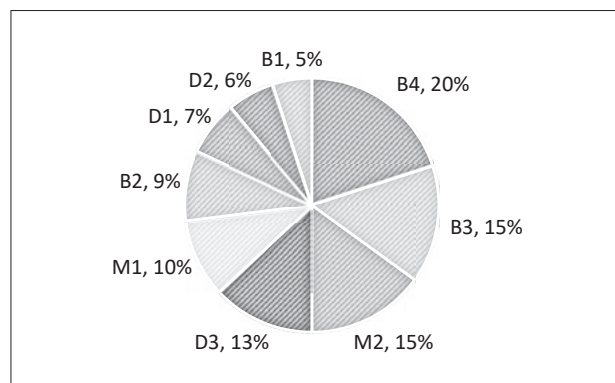


図3 学年内訳

3-4 セッションの種類

カンバセーションセッションは予約可能枠が多い（年度にもよるが、例えば2019年は、カンバセーションセッション対ライティングセッション及びプレゼンテーションセッションの合算が、3対1の割合）こともあり、69%と最も利用されていた。次にライティングセッション（30%）、プレゼンテーションセッション（1%）の順で利用があった。特に、カンバセーションセッションでは、留学に向けてIELTSなどの試験対策として定期的に利用する学生が多いことが、利用者数につながっていると予想する。それに対し、ライティングセッションの利用目的に多い投稿論文の確認や、プレゼンテーションの利用目的に多い国際学会等の発表準備は、必要になった際に利用する傾向にあることも影響していると考えられる。

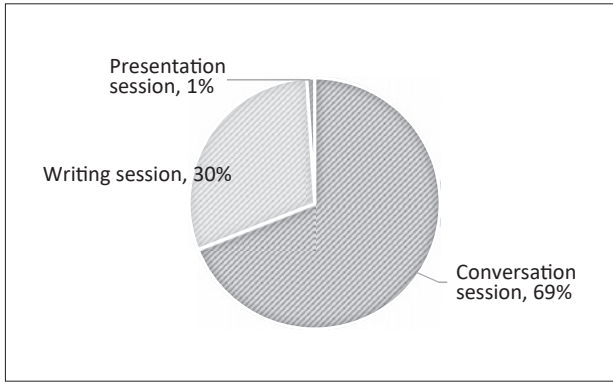


図4 セッションの種類

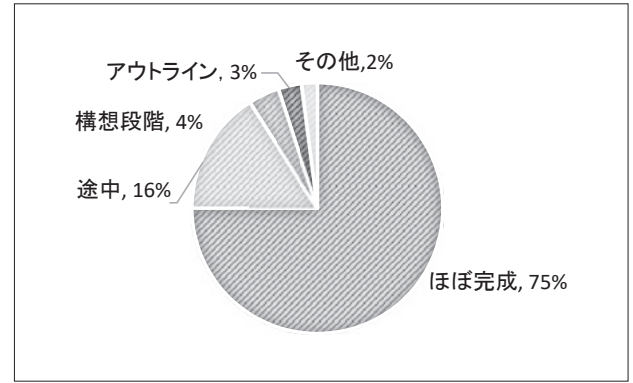


図6 原稿の準備段階

3-5 利用内容

3つのセッションの利用目的を合わせて分析をすると、IELTS、TOEFLなどの英語試験対策が55%と約半数を占めている。次いで論文（22%）、留学や海外インターンなどの申請書（14%）での利用が多かった。

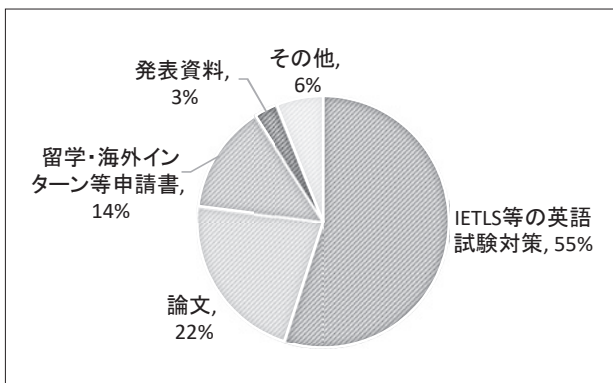


図5 利用内容

3-6 ライティングセッション

次に、セッション別のアンケート結果を概観する。まず、ライティングセッションを利用した際の「原稿の準備段階」「相談内容」「TOEICの点数」を見ていく。

3-6-1 原稿の準備段階

図6からは、利用学生のうち75%が「ほぼ完成」の段階でデスクを利用していることが分かる。図7の相談内容にも関連するが、完成させた投稿論文等の締め切り前に、文法や文章の構成を確認したいと利用する学生が多い。また、4%と少数ではあるが、「構想段階」で利用する学生もいる。デスクは、締め切り直前の最終確認だけでなく、構想段階から利用して、基本的な構成などから少しずつ講師と相談しながら進めていくことも推奨している。

3-6-2 相談内容

先述したように、「ほぼ完成」した原稿の「文法を確認したい」（73%）、「文章の構成を確認したい」（22%）といった相談内容が大半を占める。ライティングセッションにおいては、「論文を書いたが、正しいか分からないから確認して欲しい」といった学生の声を受けて開設した通り、一番のニーズは「完成文章の文法・文章の構成確認」にあるといえる。

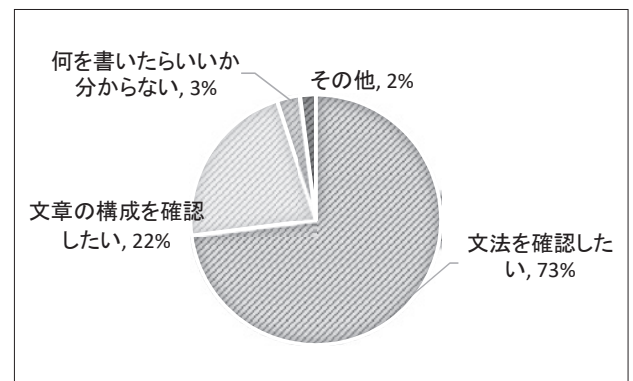


図7 相談内容

3-6-3 受講者のTOEIC点数

図8にあるように、ライティングセッションを利用する学生の55%が800点台と、比較的、TOEICの点数が高い傾向にあった。定期的に利用する、モチベーションの高い学生も多いため、全体的に点数が高いことも考えられる。ただしアンケートへの点数の記入は任意のため、比較的高い点数を持っている学生がアンケートに点数を回答した可能性も否定できない。

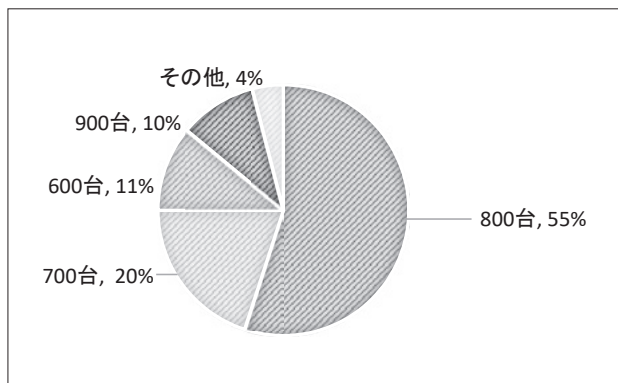


図8 TOEIC点数

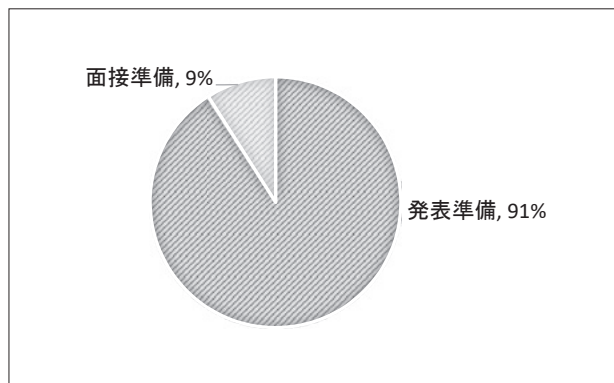


図10 利用内容

3-7 プレゼンテーション

次に、プレゼンテーションセッションの「準備段階」「利用内容」「相談内容」について確認する。

3-7-1 準備段階

ライティングセッションは利用時点で「ほぼ完成」が75%と大半を占めていたのに対し、プレゼンテーションセッションに関しては、48%が「途中」、43%が「ほぼ完成」との結果が出た。発表の練習がまだ十分ではないと感じている段階で、プレゼンテーションセッションを利用し、個別指導のもと発表に向けて練習を重ねる学生が多いことが、48%と約半数の利用学生が「途中」と回答した結果につながっていると考察する。

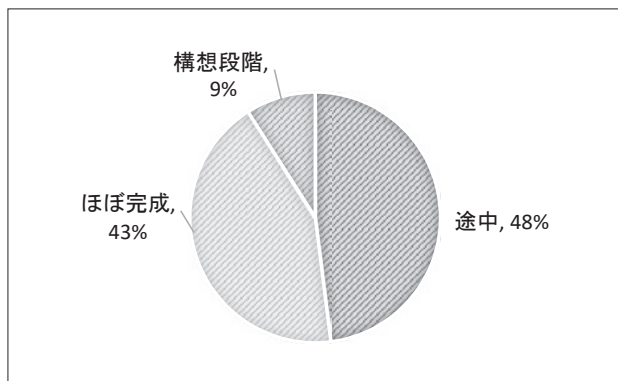


図9 準備段階

3-7-2 利用内容

発表準備が91%と、ほとんどの学生が国際学会等の発表準備に向けて利用している。少数ではあるが、「面接準備」として、海外インターンシップや外資系企業の面接などに向けて利用する学生もみられた。

3-7-3 相談内容

先の利用内容と関連し、「発表資料の確認」が67%、次いで多くの学生が苦手とする「質疑応答の確認」や「ジェスチャー等発表の基本練習」と続く。特に利用者のコメントから、ジェスチャーやアイコンタクトといった発表の基本練習は、通常の授業ではほとんど受けたことがなく、デスクの利用を通して意識して実践することで、英語で発表することへの自信につながったといった声が多く届いている。

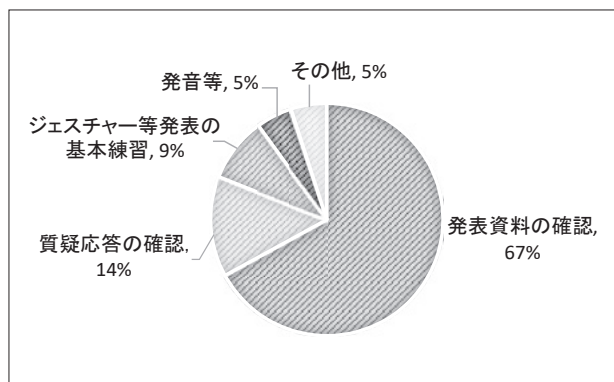


図11 相談内容

3-8 カンバセーションセッション

次に、カンバセーションセッションの「利用内容」「受講者のTOEIC点数」について確認する。

3-8-1 利用内容

カンバセーションセッションの利用内容については、「日常会話練習」(44%)、「IELTS等の英語試験対策」(32%)、「留学準備」(13%)の順で多かった。また、「日常会話練習」で利用した学生の中には、具体的には決まっていないが、いずれ留学をしたいので練習しているといった声も多く寄せられた。本結果から、カンバセーションセッションが、留学時に必要な日常会話及び留学

に必要なIELTSなどの英語試験対策などとして利用されており、特に留学の促進に寄与していることが分かる。また、少数ではあるが、「研究室で必要な英語の練習」といった内容も挙げられた。研究室で留学生と協働しながら研究を進めるための英語力は、英語による論文投稿や国際学会での発表と同様に、重要であるとする。

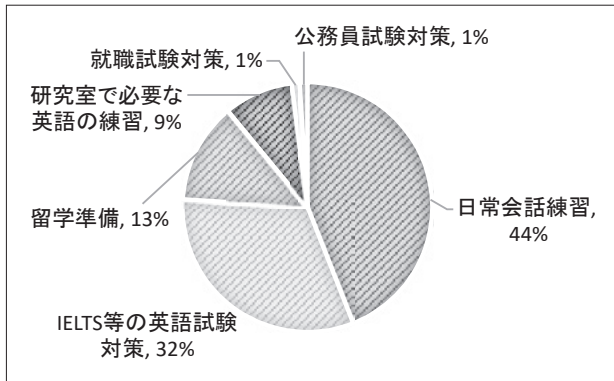


図12 利用内容

3-8-2 受講者のTOEICの点数

最後に、カンパセーションセッションを利用した学生のTOEICの点数について確認する。カンパセーションセッション利用者は、例えば800点台が30%、次いで700点台が21%と、利用者の55%が800点台であるライティングセッションと比較すると低い傾向にある。しかし、ビジネスレベルの英語力の基準とされている700点を上回る学生が合計51%であり、全体的に高い得点を持った学生が利用しているとも捉えることが出来る。これは英語学習への高いモチベーションを持って自律的にデスクを繰り返し利用している学生であることが要因の一つと考えられる。

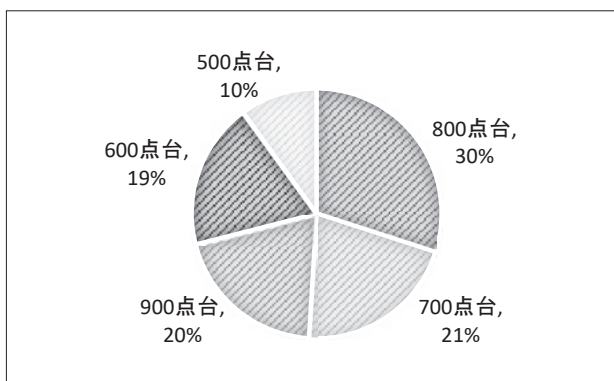


図13 TOEIC 点数

3-9 利用者コメント（アンケートより一部抜粋）

次に、利用者のコメントを一部抜粋する。なお、

「Skypeがうまくつながらなかった」といった通信状況に関するコメント以外は全て、ポジティブなフィードバックであった。

- ・論文を書くときはほぼ毎週予約します。自宅で英語の文法校閲をしていただくととても便利です。効果は十分にあると思います。最近語学力が伸びたと感じます。

（博士後期2年，論文）

- ・毎週のセッションで学ぶことが非常に多く、とても役に立っています。英語を確認していただく機会がなくて困っていたので、とても助かります。

（学部3年，IELTS）

- ・自身の書いた英文を直してもらうことで、英文作成に重要な構造について深く理解することができた。自身では気が付かなかった、あいまいで不明瞭な意味の文章を修正することで、自身の考えを整理することができた。また、書き始める前の、アイデアの整理が重要であることがよく分かった。

（博士前期1年，投稿論文）

- ・説明する練習を行うことで、学会でスムーズにコミュニケーションをとることができた。また、表現を見ていただいたことで、正確に内容を伝えることができた。

（博士後期2年，学会発表）

- ・人前で英語を話すことに慣れることができた。以前は言葉に詰まるが多かったが、デスクを利用することで、改善することができた。

（学部4年，会話練習）

- ・的確なアドバイスと面接のポイントはとても勉強になりました。面接に対する不安も消え、自信が付きました。面接頑張ってきます。

（博士前期1年，インターンシップ面接練習）

- ・簡単な同じミスが沢山あり、それを直せば一気にミスが減ることが分かった。

（学部4年，留学準備）

- ・読み手に伝わりやすい説明の仕方を提案してもらえて良かったです。

（博士後期3年，論文）

- ・デスクで何度も原稿を見直していただき、発表の練習をさせていただいたお蔭で、国際学会で賞を受賞することができました。本当にありがとうございました。

(博士前期2年、国際学会発表)

- ・コロナで留学や国際交流が難しい状況で、オンラインでネイティブと話せて助かっています。これからも定期的に利用していきたいです。

(学部3年、会話練習)

様々な内容で利用した学生から、多くのポジティブなフィードバックが寄せられている。添削業者と違い、一つひとつの利用内容に個別に対応し、今後に向けた改善策をともに見つけていくことで、学生自らの気づきとモチベーションをもたらしめていることが分かる。

また、長引くコロナ禍においては、留学を断念せざるを得なかった学生の利用も目立った。実践を通して英語を使う機会がなかなか確保できない状況で、Skypeセッションを利用することで、英語を話し人と交流する機会があったことに感謝する学生の声も多く寄せられた。

4 まとめ

本調査では、ランゲージサポートデスクを利用した学生を対象としたアンケート結果をもとに、各セッションの内容、利用状況、学生のニーズについて分析を行った。利用実績データから明らかなように、本デスクは理系・文系を問わず、幅広い分野や学年の学生たちに多様な目的で利用されており、大阪大学の学生にとって必要不可欠な存在となりつつある。

学生は、本デスクを利用することを通して、自分自身の英語力を客観的に評価し、さらなる能力向上への積極的な態度を養うことができると考える。また、アンケート結果からは、デスクの利用が留学に必要な英語試験対策や英会話力といった、グローバル社会への新たな一歩を踏み出す一助となっていることが分かる。さらに、例えば利用学生のコメントにもあったように、国際学会で賞を取るなど、研究成果などを国際社会に発信するうえでの自信や積極性に繋げるきっかけともなっている。このような学生を一人でも多く輩出するべく、開設以来、大阪大学の学生の英語学習に関する様々なニーズに個別に対応し英語力向上に貢献してきた。

これまで試行錯誤を重ねながらも継続的に運用することができた本デスクであるが、課題も多く残る。デスク

開設以来、予算削減により、講師のスケジュール調整や予算配分、セッションの削減など、運営面での困難が続いた。当デスクのような機関は、長期的かつ幅広い学生を対象に安定的に学習をサポートすることで、大学全体の教育の質向上に直結する。そのため、長期的な視点で予算や人材の確保を進めることが、今後の重要な課題である。

今後も実践面、研究面の双方から小規模ながらも実績を積み、効果的な活動を展開していく。また、学内の他部局との連携を深め、理解と協力を得ながら、ランゲージサポートデスクの幅広い支援の実現と長期的な継続を目指したいと考える。

受付 2024.10.7 / 受理 2025.1.17

参考文献

- Benson, P. (2007). Autonomy in language teaching and learning. *Language Teaching*, 40 (1), 21-40.
- Gremmo, M. J., & Riley, P. (1995). Autonomy, self direction and self access in language teaching and learning: The history of an idea. *System*, 23 (2), 151-164.
- 中橋真穂・アンダーソンジョーン (2017) 「ライティングヘルプデスク設置への取り組み：研究発信能力の向上に向けて」, 『大阪大学高等教育研究』, 5 (5), pp.47-55.
- Simpson, J. (2004) Assessing needs, identifying an institutional home, and developing a proposal. In B. B. Silk (Ed.), *The writing center resource manual*. Emmitsburg, MD: NWCA Press.
- 吉田弘子・Scott Johnston・Steve Cornwell (2010) 「大学ライティングセンターに関する考察--その役割と目的」, 『大阪経大論集』, 大阪経済大学, No. 61 (3), pp.99-109.